第 10 号
November 2013

いわて高等教育コンソーシアム
The Iwate Higher Education Consortium

NEWS LETTER

http://www.ihatov-u.jp/

～岩手の復興を人材育成から、今こそ連携の力で！～

Index

■ ご挨拶 1
「記念すべき『ニュースレター 10 号』に思う」

■ PICK UP NEWS 2～4
地域の復興を担う人材の育成に向けて
○いわて学
○ボランティアとリーダーシップ、危機管理と復興
○被災地の高校生と学生がともに学ぶワークショップ

■トピックス 5～7
・きずなプロジェクト
・復興の担い手フォローアップ事業「PFA を学ぶワークショップ」
・学習支援交流プロジェクト
・影絵人形劇の開催
・宮古市立図書館田老分室 書架レイアウトリニューアル
・研究報告（文化財の被災調査・修復研究チーム）
・いわての大学に行こう！ ーいわて 5 大学、駅前講義ー
・学生による地域づくり活動 in 八幡平市 活動報告
・シンポジウム 東日本大震災を超えて：大学のなすべきこと、できること

■ 特別寄稿「復興へのメッセージ」 8

■ 平成 25 年度 下半期の予定 8

ご挨拶

記念すべき「ニュースレター10号」に思う

放送大学 岩手学習センター
所長　齋藤徳美

平成21年7月31日に、本ニュースレターの第1号が創刊され、筆者は当時の運営委員長として、「発刊にあたって」との巻頭言を述べさせていただく栄(?)に浴した。それから4年余を経て、新規に加入をお認めいただいた「放送大学岩手学習センター」の代表として、「いわて高等教育コンソーシアム」の活動に再び参加させていただくことに大きな喜びを感じている。

国立大学の法人化以前から、岩手の各大学は地域人材の育成、新たな地域づくりなど岩手に根を下ろした大学運営を目指してきた。それにしても、広大な県土に4年制大学はたったの5つ、少子化の中でそれぞれの大学が発展し、地域に貢献するには、機能を補完し合い連携を深めることが不可欠と考えられた。幸いにして、「5大学学長会議」の実績をもとに、文部科学省の「いわて高等教育コンソーシアムにおける地域の中核を担う人材育成と知の拠点形成事業」に採択され、5大学を結ぶ情報ネットワーク体制の整備と共に、教育力の向上、知の拠点形成、進学率の向上、地域の活性化などの取り組みが推進された。専門の異なる14学部からなる総合大学のように機能する「いーはとーぶ大学」も形をなしつつあり、事業の成果は着実に上がっている。創立に携わった一人として、関係者のご尽力に深く感謝するものである。

こうしたなかで、過去最大級の津波災害を受けた本県は、復興への厳しい道のりの途にある。「いわて高等教育コンソーシアム」が展開する復興事業は、既発行のニュースレターに紹介されているように、郷土の復興に大きく貢献している。一方で、地方が抱える根源的な課題、持続可能な地域の姿をどう描くか、新しい国と地方との関係をいかに築くのかなど、まさに大学の知識と叡智を結集すべき課題が横たわったままであることも事実である。双肩にのしかかる責務もまた重いことを痛感する。

放送大学岩手学習センターには、専任の教員はおらず研究室も少ない。一方で、約900名の学生は大概仕事を持ち年齢も多様であり、地域の中核を担っている人材も少なくない。また、千葉の本校および全国57の学習センターとネットワークで繋がり、岩手から全国に情報を広く発受信する機能を有している。これまでの構成校とは一味違ったカラーをもって、「いわて高等教育コンソーシアム」の一員としての役割を果たすべく、尽力したいと念じている。

PICK UP NEWS

地域の復興を担う人材の育成に向けて

いわて高等教育コンソーシアムが取り組む地域の復興を担う人材の育成。
コア科目による教育プログラムや、自らが考え気づきを促すワークショップなどを行っています。

いわて学

「いわて学」は、いわて高等教育コンソーシアムの共通授業として、岩手県立大学が主務校となり平成22年度から開講しています。

東日本大震災以降は、従来のいわて学に震災復興の視点を取り入れ、「いわての復興を考える」をサブテーマとして実施することで、「いわて」の地域特性や魅力を知り、これらを土台として復興を考え、「いわて」の復興を担う人材の育成を目的としています。

宿泊現地講義：岩泉町小本　地元ガイドによる説明

平成25年度前期は、『「三陸から知るいわて」～いわての復興を考える』をテーマに、5月18日（土）から6月29日（土）までの15回開講、学生106名が履修し、三陸地方の「自然」「歴史」「復興のすがた」について学びを深めました。

現地宿泊講義（6月15日から16日）では、岩泉町・宮古市・山田町・大槌町・釜石市を訪れ、岩泉町小本及び宮古市田老の地元ガイドによる津波体験の説明、山田町「鯨と海の科学館」、釜石市「鉄の歴史館」の見学を通じて、三陸沿岸地域が海や鉄と関わりあって歩んできたことを知り、そして、被災地で暮らす人々の復興と防災への思いを共有しました。

参加した学生からは、「実際に被災地を訪れることで、被害状況や復興の状況を体感することができ、三陸の復興について理解が深まった」という意見が多数寄せられるなど、学生が主体的に「いわての復興」について考えられる授業となりました。

宿泊現地講義：陸中海岸青少年の家でのグループワーク

授業内容・日程

○平成25年度前期いわて学「三陸から知るいわて～いわての復興を考える」

回	日時		テーマ・内容	講師	会場
1&2	5/18（土）	9:30～12:45	○授業概要説明 ○グループワークで考える三陸いわて	岩手県立大学 豊島 正幸	アイーナ803
3&4	5/25（土）	9:30～11:00	○自然から知る三陸いわて	岩手県立大学 豊島 正幸	マリオス188
		11:15～12:45	○ペルー・アンデスの大災害で考える共生のかたち	フリーライター 高橋 正也	
5&6&7	6/1（土）	9:30～12:45	○歴史から知る三陸いわて	盛岡大学 熊谷 常正	アイーナ812
8&9	6/8（土）	9:30～15:00 ※集合時間等別途指示	○博物館から知る三陸いわて ～岩手県立博物館での現地講義	岩手県立博物館 学芸員	岩手県立博物館
10&11 12&13	6/15.16（土･日）	1泊2日 ※詳細別途指示	○現地で知る三陸いわて ～岩泉・宮古・山田・大槌釜石での現地講義	現地での講師等、授業の詳細は別途連絡	宮古周辺
14	6/29（土）	9:30～11:00	○東日本大震災津波からの復興に向けて	岩手県復興局 森　達也	アイーナ803
15		11:15～12:45	○グループワーク（まとめ）	岩手県立大学 豊島 正幸	

○平成25年度後期いわて学「平泉から知るいわて～いわての復興を考える」

回	日時		テーマ・内容	講師	会場
1&2	10/12（土）	9:30～12:45	○授業概要説明 ○グループワークで考える平泉	岩手県立大学 豊島 正幸	アイーナ803
3&4	10/19（土）	9:30～12:45	○平泉から知るいわての歴史	盛岡大学 熊谷 常正	アイーナ803
5	11/9（土）	9:30～11:00	○平泉から知るいわての資源（漆）	浄法寺漆産業 松沢 卓生	アイーナ812
6		11:15～12:45	○平泉での現地講義に向けて	盛岡大学 熊谷 常正	
7&8&9	11/16（土）	9:00～16:00 ※集合時間等別途指示	○平泉現地講義	盛岡大学 熊谷 常正 岩手県立大学 豊島 正幸	平泉町
10&11	11/23（土）	9:00～12:45 ※集合時間等別途指示	○現地講義 ～志波城古代公園・盛岡市遺跡の学び館	盛岡市教育委員会 今野公顕 岩手県立大学 豊島 正幸	盛岡市
12	11/30（土）	9:30～11:00	○世界遺産と三陸復興（1）	大槌町教育委員会 佐々木 健	アイーナ803
13		11:15～12:45	○世界遺産と三陸復興（2）	釜石市教育委員会 森 一欽	
14	12/7（土）	9:30～11:00	○平泉の情報発信と地域振興	岩手県県南広域振興局 筒井 則裕	アイーナ803
15		11:15～12:45	○グループワーク（まとめ）	岩手県立大学 豊島 正幸	

前期「ボランティアとリーダーシップ」、後期「危機管理と復興」

前期「ボランティアとリーダーシップ」は、ボランティア活動に関する知識や技能、リーダーの役割、組織の動かし方などについて学び、多様な状況に対応し得る能力と知見の獲得を目的とした科目です。

後期「危機管理と復興」は、危機管理や防災、都市計画、災害カウンセリング、地域コミュニティ再生などに関する知識を学ぶとともに、その内容をグループワークを通じて実習することで、復興の担い手に必要な知見と能力の獲得を目的とした科目です。

震災復興への特別講義として平成24年度より開講しており、「いわて学」や「地場産業·企業論／企業研究」と同じく、地域リーダー育成プログラムのコア科目として位置づけられています。

授業はテーマごとにリレー方式で行います《オムニバス科目》。各テーマの専門家がいわてコンソ内で見つからないこともあり、全国からボランティア教員を募集することになりました。震災が起きた年の11月に、全国大学コンソーシアム協議会の協力を得て、協議会から加盟するコンソーシアムへ、各コンソーシアムから連携校へと依頼文書が届けられ、「ボランティアとリーダーシップ」で7名、「危機管理と復興」で7名の計14名のボランティア教員が集まり、土曜の午後に2コマずつ授業を担当していただけることになりました。

「ボランティアとリーダーシップ」は、コミュニケーショントレーニングという講義全体のアイスブレークに始まり、グループワークやボランティア活動の歴史的展開を学びつつ、グループ単位の作業が多分に折り込まれた演習的要素の強い授業になっています。また、リーダーシップについて学び、ボランティア活動のみならず、組織運営やソーシャルビジネスへの展開可能性を実践的に学習しています。

平成25年度前期の履修者は、岩手大学生23名、岩手県立大学生2名、一関工業高等専門学校生4名の計29名で、グループでの作業時にはメンバーが入れ替わるようにしてもらい、授業終了時にはクラス全体が一つのグループとして機能するような連帯感が生じていました。

また、岩手県の復興実施計画（第2期）と三陸創造プロジェクトへの提言作りを目的に、6月29日に行われた「被災地の高校生とコンソーシアム連携校の学生がともに学ぶワークショップ」にも受講生が6名参加し、ファシリテーター役を努めるなど、授業で学んだことを実践してもらいました。

このほかにも、学生によるボランティア活動「きずなプロジェクト」にも一部の受講生は参加しており、学びと実践を両輪とする人材育成に取り組んでいます。

前期「ボランティアとリーダーシップ」講義風景

○平成25年度前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」

回	実施日	会場	内容	講師	所属大学等
1&2	5/11（土）	マリオス 18F 187	コミュニケーショントレーニング	西村 千尋	長崎県立大学 経済学部 地域政策学科 教授
3&4	5/18（土）	アイーナ 7F 学習室1	グループワーク	肥後 祥治	鹿児島大学 教育学部 障害児教育学科 教授
5&6	6/8（土）	マリオス 18F 188	リーダーシップとボランティア	吉田 祐一郎	四天王寺大学 人文社会学部 人間福祉学科 講師
7&8	6/22（土）	アイーナ 7F 学習室1	高度情報化とボランティア	山本 佳世子	電気通信大学 大学院 情報システム学研究科 准教授
9&10	7/13（土）	マリオス 18F 187	絆・仲間作り	田島 弘司	上越教育大学 学校臨床研究コース 准教授
11&12	7/27（土）	アイーナ 7F 学習室1	組織マネジメント	宮川 正裕	中京大学 総合政策学部 教授
13&14	8/3（土）	マリオス 18F 185·186	ソーシャルビジネス	大室 悦賀	京都産業大学 経営学部 准教授
15	8/3（土）	マリオス 18F 185·186	振り返り：グループワーク	後藤 尚人	岩手大学 人文社会科学部 教授

○平成25年度後期集中講義「危機管理と復興」

回	実施日	会場	内容	講師	所属大学等
1&2	10/26（土）	マリオス 18F 187 会議室	オリエンテーション	江本 理恵	岩手大学 大学教育総合センター 准教授
3&4	11/2（土）	アイーナ 7F 学習室1	防災教育	城下 英行	関西大学 社会安全学部 助教
5&6	11/9（土）	アイーナ 7F 学習室1	災害カウンセリング	鶴田 一郎	広島国際大学 心理科学部 臨床心理学科 准教授
7&8	11/16（土）	アイーナ 7F 学習室1	都市防災	和泉 潤	名古屋産業大学 環境情報ビジネス学部 教授
9&10	11/30（土）	マリオス 18F 187 会議室	心理的応急処置：PFA（サイコロジカル・ファーストエイド）	大沼 麻実	国立精神·神経医療研究センター 研究員
				佐藤 麻衣子	アメリケアズ（米国NPO）
11&12	12/7（土）	アイーナ 7F 学習室1	危機管理	村田 静昭	名古屋大学大学院 環境学研究科 教授
13&14	12/14（土）	アイーナ 7F 学習室1	地域コミュニティ再生	室田 昌子	東京都市大学 環境学部 環境創生学科 教授
15	12/14（土）	アイーナ 7F 学習室1	振り返り：グループワーク	後藤 尚人	岩手大学 人文社会科学部 教授

PICK UP NEWS

被災地の高校生と学生がともに学ぶワークショップ

次世代を担う高校生と学生が被災地（故郷）の復興について自らが考え、未来を描き、互いに刺激しあいながら学ぶことで“考える”力を養い、進学・就職などの近い将来に新たな気づきを与え、将来のリーダー、10年後、20年後の地域を支える中核的な人材の育成へ繋げることを目的に開催しています。

今年度は、「私たちの未来を考える」をテーマに、沿岸被災地の高校8校の生徒61名とコンソーシアム連携校の学生26名が参加しました。

岩手大学人文社会科学部の後藤尚人教授が進行役を務め、岩手県復興局の小野博計画担当課長らが岩手県における復興の取組について説明。参加者は13グループに分かれ、産業振興やエコタウン形成、津波伝承まちづくりなど5つのテーマを選び意見を交わしました。多彩なエコ体験ができるテーマパーク構想など、若者ならではの柔軟な発想をそれぞれのグループがまとめ人気投票を実施。上位5グループがステージ上で将来ビジョンを発表しました。

今回は、岩手県が今年度策定する「復興実施計画（第2期）」や「三陸創造プロジェクト」へ若者の立場から提言するもので、小野課長からは、「非常に貴重な提言をいただいた。発表があったグループの意見はもちろんのこと、グループ討論の際の一人一人の発言が大きな宝だと感じた。知事には全ての提言を伝えるとともに計画に反映させていきたい」との講評をいただき、今後自らが率先して復興に関わっていく重要性を“ともに学ぶ”機会となり、非常に有意義なワークショップとなりました。

このような活動を通じて、高校生には“学び”の必要性を認識してもらい震災によって大学進学を諦めることがないよう、また学生にはこれからの復興を担える人材として更に学びを深化するよう活動を継続する予定です。

岩手県の復興への取組みについて説明する復興局・小野計画担当課長

グループワークの様子

提言を発表する高校生と学生

過去の開催日	テーマ	参加人数	開催地
第１回（24.8.19）	復興を担う人材とは	高校生 28 名（4 校）、学生 11 名	盛岡市
第２回（25.6.29）	私たちの未来を考える	高校生 61 名（8 校）、学生 26 名	宮古市

●参加学生の声

高校生と学生が作成した提言の一部

直接被災地の高校生とお話ししてみて、やはり知らないことが多く、復興や継承と一言にいっても簡単ではなく、地域によって抱える問題も異なり、どんな提言を出そうかとても悩みました。しかし時間も限られているため、どうしてなかなか復興が進まないかと考えたときに問題を解決するまでの時間がかかってしまうのではないか、という見解になりました。そこで私たちのグループは市役所などに個別に相談ができて、市町村単位の判断で被災地（者）の要望に応えることが出来る窓口「まちづくり課」という提言案を考えました。この提言案は13グループ中見事3位でした。

このワークショップをうけ、復興状況だけでなく高校生が故郷に対する思いなどを知ることができて自分も口だけでなく微力だとしても行動していかなければならないと痛感しとてもいい刺激を受けました。これからはいわての未来のために頑張っていきたいです。

一関工業高等専門学校 4年　物質化学工学科　石川　沙絵

きずなプロジェクト
日本青年会議所主催学習支援事業「学(まなび)の夏休み」

8月2日から4日までの3日間、宮古市･区界高原少年自然の家で小･中学生に対して学習支援のボランティア合宿をしてきました。

子供たちに勉強の楽しさを伝えることを目標に、答えだけを教えるのではなく、「どうしてこうなるのか 」ということを一緒にたくさん考えてきました。

初めは緊張気味だった子供たちも、学校とはまた違った学習スタイルに次第に慣れ、勉強に対してもどんどん意欲的になっていったのが印象的でした。

2日目にはグループごとに森へ探索に出かけたり、キャンプファイヤーをしたりと勉強以外にも様々な活動をしてきました。

そのような活動後には、中学生が年下の子の面倒を見る姿も見られ、子供たちにとって多くの「学(まなび)」があったのではないかと思います。

別れ際には、「勉強が好きになった」、「大学生になったらこのようなボランティアに参加したい」などの声を子供たちからもらうことができ、大変嬉しく思いました。

子供たちと関わる中で、私たちにとっても多くの「学(まなび)」があったことは言うまでもありません。

今回は関東の学生も岩手に来て活動してくれましたが、このような活動は1度きりではなく、来年以降も続けさせていただきたいと強く感じました。

岩手大学 人文社会科学部 2年　内島あずさ

学習支援活動の様子

2日目のキャンプファイヤー

復興の担い手フォローアップ事業「PFAを学ぶワークショップ」
(in 東北みらい創りサマースクール)

被災者と向き合う自治体職員･教育関係者への二次的な支援の一環として、WHO（世界保健機構）版のPFA（サイコロジカル･ファーストエイド：深刻な危機的出来事に見舞われた人々に対して、支援者が心理社会的支援を提供するためのガイドライン）についてワークショップ形式で学ぶ学習会を8月10日（土）に盛岡市内で行われた東北みらい創りサマースクールの中で開催しました。

《参加者の声》

座学やロールプレイを通して、深刻なストレス状況にさらされた人々への現実的な援助や、支援にあたる際の心構えについて学びました。

ロールプレイでは、災害発生直後の避難所を想定し、避難所の運営役と、そこへ避難してきた役との2手に分かれ、避難所の運営を体験しました。避難者の安心につながる言葉かけや対応を体感すると同時に、現場で起こりうる混乱も目の当たりにし、情報の扱いやニーズの把握の仕方について、支援者のよって立つものがあることが活動の支えになると感じました。

危機的出来事に見舞われた方に対して、「何かをしなければ」と考える人は少なくありません。しかし、時に、ひとりよがりの言動となる恐れがあります。PFAのガイドには「すべきこと」「してはならないこと」が明確に記されており、押しつけがましくなく、人々を安心させることが大前提であると説明を受けました。『無理に話をさせない』といったPFAの倫理的指針は、心理的支援に関わらず、支援者すべてが心得るべき重要な事柄だと感じました。

また、支援者自身のケアを行なうことが、責任ある支援に含まれるというお話も印象に残っています。

岩手大学大学院 人文社会科学研究科
2年　吉田 奈央

《講師》
- 外務省メンタルヘルス対策上席専門官　鈴木　満 氏(医学博士:精神科医)
- 国立精神･神経医療研究センター精神保健研究所 災害時こころの情報支援センター研究員　大沼 麻実 氏
- アメリケアズ(米国NPO)　佐藤 麻衣子 氏

※WHO(世界保健機構)版のPFA:精神保健の専門家以外の方にも普及が容易で、災害や紛争地の支援に世界各地から集まった人々が1日で習得できるシンプルさが特長です。

学習支援交流プロジェクト ～岩手県立大学混声合唱団Polishと宮古高校生の交流～

9月15日（日）、岩手県立大学講堂にて同大学混声合唱団Polishと宮古高校音楽部との合唱交流を行いました。2度目の交流となる今回は、宮古から約30名の生徒が岩手県立大学を訪れ、合同練習、互いの合唱披露、また全体で「ふるさと」を斉唱することで交流を図りました。

混声合唱団Polish代表の一井七海さん(岩手県立大学3年)は、「今年度も宮古高校音楽部さんにお会いできることをとても楽しみにしていました。今回は一緒に歌う事はもちろん、語り合う･一緒にレクをする時間を多めにとり、そういった面からも絆を深めることができました。大学生と高校生、ましてや、内陸と沿岸という世代と地域を越えた交流ができることは本当に貴重なものだと思います。離れていてもお互いを応援し合える仲間がいること（できたこと）を非常に心強く、また嬉しく思いました。ぜひもっと多くの学生に経験して欲しいです。」と感想を寄せ、今回の活動を振り返りました。

合同練習の様子

レクリエーションの様子

講堂全体を使い、「ふるさと」斉唱

宮古市田老地区での影絵人形劇の開催

昨年度に引き続いて宮古市立図書館の支援活動を継続しており、津波の被害が甚大であった宮古市田老地区にある田老保育園と田老公民館にて8月6日に影絵人形劇のイベントを開催しました。演題は「大きなかぶ」と「ブレーメンの音楽隊」で盛岡大学短期大学部の18名の学生が影絵人形の作成の準備から上演まで携わりました。

田老保育園は仮設住宅が設けられているグリーンピア三陸みやこの敷地内にあり被災した子どもたちを受け入れている保育園です。かぶを引っ張る場面では「うんとこしょ、どっこいしょ」と全園児約40名が大きな声援をくれました。

田老公民館は子ども達が学校から遠く離れた仮設住宅に移ってからは利用が少ない状況であり、夏休みの利用活性化および10月の公民館図書室の再開館に向けてのアピールを兼ねたイベントとなりました。学童保育の児童ら約20名が鑑賞してくれました。上演後は参加した学生も子ども達と一緒に影絵遊びやゲームをするなど交流を持つことができ、学生達にとっても有意義な活動となりました。

田老保育園での影絵劇の様子

影絵人形劇を鑑賞した田老保育園の園児たち
（影絵の前に手遊びをみんなでしています）

宮古市立図書館田老分室の書架レイアウトリニューアル

宮古市立図書館田老分室は田老公民館内に設置されていた図書室です。東日本大震災により床上15cmの浸水被害を受け、仮設図書館での運営を余儀なくされていました。10月のリニューアル再開館に向けて、8月28日・29日に「被災地の図書修復及び整備についての研究チーム」が書架レイアウトの助言と指導を行いました。

主動線に正対して書架を配列することで空間の奥行きを感じさせ、主動線に沿って歩くことで蔵書全体の構成が把握しやすいように工夫を凝らしました。また、従来の書架は2m近く高さのある高書架が中心でしたが、1.5mの中書架を一部に採用して子どもや女性・高齢者にも手の届き易いようにしています。料理本や手芸などのニーズが多い実用書を、利用者の目につき易い入口近くの書架に配列することで分かり易いレイアウトを実現しました。再開館後に多くの利用者が訪れることを期待しています。

リニューアル前の
宮古市立図書館田老分室の書架
（平成24年8月29日撮影）

新しい書架レイアウト後の
宮古市立図書館田老分室
（平成25年8月29日撮影）

研究報告（文化財の被災調査・修復研究チーム）

文化財チームの活動の一つは、時には図書館チームと一緒に文化財保護の先進的事例を視察し、被災地の復興に役立つ提言につなげるということがあります。今回、以前から文化財保護のあり方として注目される鹿児島県奄美群島の「奄美遺産」「シマ（集落）遺産」という取組を視察してきました。

近年、国の文化財に対する考え方も、モノ単体で捉えることから総合的に捉えることに移行してきました。この「奄美遺産」というあり方は、市町村ごとに〈歴史遺産〉〈生活遺産〉〈集落遺産〉という重点テーマを掲げつつ遺産を取り上げ、それぞれの要素を結びつける「ストーリー」を提示してそれらを関連づけ、そうした〈関連遺産群〉を「奄美遺産」と呼ぶことにしたというものです。簡潔に言えば、通常文化財認定されているものは、単体でそれぞれの価値を認定するものですが、それを地域の歴史や生活のストーリーの中に位置づけて総合的に認定していくという方法です。

「シマ遺産」というものは、その「奄美遺産」の基礎にあたるもので、集落単位で専門家がシマの人たちを集めて「シマ学講座」を開きながら、「敬い、守り、伝え、残したいシマ遺産」をみんなで考えながら、実際に集落を歩いてそれを実感し、自分たちでリストアップしてゆくという方法です。

今回の調査では、シマ遺産の活動をリードされている中山清美奄美博物館長の案内で、中世の山城（グスク）があり、近世期薩摩藩の代官所がおかれた笠利町赤木名集落を回りました。また、シマ遺産の作業が既に終わった宇検村宇検集落を、宇検村教育委員会の田中聡子学芸員の案内で視察しました。

東日本大震災は、被災地のそれまで文化財として認められていたものの多くを破壊し喪失させました。まだまだ先のことでしょうが、被災地が通常の生活を取り戻したときに、改めて自らの地域に残された歴史遺産・文化財というものを再発見し、それを保護する活動を起こさなければなりません。その時に、そこに生活する人々が「自ら考え、自らの足で実感し、それを保護してゆく」という奄美群島のあり方は大きな示唆を与えてくれると思います。

倉木崎海底遺跡（12～13世紀の
中国製の陶磁器を大量に発見）

シマ遺産の群倉（ボレクラ）

「いわての大学に行こう！」 ーいわて5大学、駅前講義ー

県内高校生の大学進学率向上を目的とし、今年度も系統別説明会を実施しました。8月5日（月）、盛岡地域交流センターマリオスにおいて、主に高校1,2年生を対象として開催した「駅前講義」には、県内17校より、のべ114名の参加がありました。

受講の様子

講師は連携校より専門の教員が集まり、大学での学問に触れた参加者からは、「今まで自分が知らなかったことがわかり、進学する学科を選ぶ参考となった」「大学の先生からの説明を聞けたことで、新しい見方で進路を考えることができそうです」といった感想が寄せられました。

系　統	講　師	
福祉	岩手県立大学　社会福祉学部	高橋　聡
人文・教育	盛岡大学　文学部	嶺岸玲子
医・歯・薬	岩手医科大学　生化学講座	石崎　明
工学	岩手大学　工学部	山口勉功
経済・経営	富士大学　経済学部	影山一男

県内大学の資料を入手することもできる

学生による地域づくり活動in八幡平市 活動報告

昨年度で活動を終了した「地域づくり活動 in 八幡平市」では、昨年度参加学生（盛岡大学生５名）と八幡平市舘市地区住民による氣比（きのした）風穴誘導看板の除幕式を7月13日（土）に行いました。

看板は、地域活性化策の一つとして学生が提案し、八幡平市、いわて未来づくり機構及び地域住民の協力により、国道２８２号線沿いに昨年度設置しました。この他に地域活性化策として、地域の魅力を発信する「舘市魅力ＭＡＰ」を作成し、八幡平市役所などで無料配布され、市役所には看板や魅力ＭＡＰの問い合わせが多数寄せられているそうです。

除幕式に参加した学生は、翌日の地域のお祭り（兄川先祓い）にも参加し、地域住民との絆をさらに深めました。

この活動では、学生の「この地域を元気にしたい」という熱意が地域住民にも伝わり、地域の内外に良い意味で影響を与えることができたと感じています。学生の力を存分に発揮する場を与えてくださった八幡平市役所及び舘市地区の皆様には深く感謝申し上げます。

氣比風穴誘導看板

舘市魅力ＭＡＰ

シンポジウム 東日本大震災を超えて：大学のなすべきこと、できること

8月7日（水）、岩手大学を会場に「東日本大震災の被災地におけるシンポジウム2013『東日本大震災を超えて：大学のなすべきこと、できること～教育の復興なくして地域の復興なし』（主催：日本私立大学団体連合会・日本私立短期大学協会）が開催されました。

このシンポジウムは、東日本大震災の被災地の一日も早い復旧を願うとともに、全国各地に展開する私立大学・私立短期大学並びに大学関係者が情報を共有し、大学支援の取組みを一層強固なものとすることを目的としたもので、今年度はいわて高等教育コンソーシアムとの共催で開催されたものです。

基調講演では、岩手大学の藤井克己学長が「震災地岩手からの発信－いわて高等教育コンソーシアムの取組み」と題し、県内の状況やいわて高等教育コンソーシアムの取組みなどを紹介しました。その後のシンポジウムでは中村慶久岩手県立大学長、眞瀬智彦岩手医科大学教授、藤原隆男富士大学長、徳田元盛岡大学長、藤田成隆八戸工業大学長が各大学における震災発生時から現在にいたるまでの取組みや支援等を紹介し、全国から参集した約200名の国公私立大学・短期大学関係者と情報を共有し、今後の支援の在り方を協議しました。

藤井岩手大学長による基調講演

シンポジウムの様子

特別寄稿

復興へのメッセージ

四天王寺大学 講師　吉田 祐一郎氏
前期集中講義「ボランティアとリーダーシップ」
第3回担当講師

私の専門領域は「地域福祉」です。地域福祉とは、地域住民などが相互に助け合いながら、どのように自立した生活をしていくかということを追い求めていく理論や実践のことです。この地域福祉を支えるといえるものがボランティア活動です。

今回の東日本大震災では各地から多くのボランティアが集まり、私も震災後４日目に宮城県内に入りました。この中で一番力づけられたものが、学校の体育館の避難所でスタッフとして活動していた地元の子どもたちの姿でした。当時はまだ避難所が混乱している状況でしたが、寝食を忘れて大人とともに活躍している中学生・高校生の姿を見た時には言葉にならないような嬉しさと逞しさを感じました。実は私はこれまで他の災害での支援活動にもかかわりましたが、このように子どもたちが前面に出て活躍している姿を見た機会は数えるほどしかありませんでした。そこから学んだことは、大人も子どもも関係なく、お互いに協力しながら生活することの大切さでした。これは避難所運営に限らず、地域の復興にも繋がることであり、あわせて子どもや若者も含めてまちづくりに参加・参画する重要性を感じ取ることができました。

震災から２年が経過した現在ですが、まだ多くの生活課題や地域課題があると捉えています。この状況で一人ひとりの生活や地域づくりを考えていく際に、これまで以上に世代や立場を超えた地域での協力や親密さを深めながら復興が進められることを期待しています。

関西大学 助教　城下 英行氏
後期集中講義「危機管理と復興」
第2回担当講師

「田舎の人間は助けます。訓練しなくても。」これは、私が関与しているある地域で、住民の方が怒りを押し殺すようにつぶやいた言葉です。防災分野ではつぶやきに耳を傾けることが大切と言われており、私も頭では分かっていたつもりでしたが、この時にはじめてその意味を実感したように思います。

昨年度、私たちはこの地域で津波避難の連続ワークショップを行いました。自主防災組織の方々に集まっていただき、来たるべき津波の際に全員が避難できることを目標に避難場所や経路の選定などを行ってもらいました。そして、活動の仕上げとして避難訓練を行い、その際に研究者側の希望として地元自治体の職員に負傷者役をお願いしたのです。

冒頭の言葉は、今年度のワークショップの準備会議の席上で負傷者訓練について議論を始めた際に、ある自主防災組織の方が発した言葉です。専門家であっても災害を正確に予想することはできませんので、さまざまな立場の人々が協働で防災活動を行い、分かり合うことが何よりも重要であると私は考えていました。しかし、実際には、地域の方のことを分かろうとする姿勢が欠けていたのです。

東日本大震災の復興においても、被災者の声に耳を傾けることが大切と言われています。原点に立ち返り、名実ともに分かり合うことを目指した防災のかたちを模索したいと思っています。

【特別寄稿について】
この特別寄稿は、いわて高等教育コンソーシアムが平成24年度より新規に立ち上げた特別集中講義で全国の大学からボランティアで講師をご担当いただいた先生方から、「復興へのメッセージ」をテーマに、いわて高等教育コンソーシアム集中講義での担当講義の概要説明や、講義を担当したことで改めて感じたこと、所属大学での復興へ向けた取り組みの紹介、被災地・被災者へ向けたメッセージ等について寄稿していただいたものです。

平成25年度 下半期の予定

事業内容	開催日	開催場所	対象
いわて高等教育コンソーシアム、国文学研究資料館3研究グループ合同講演会「なぜアーカイブズは必要なのか―文書保存の意義と実態」	平成25年 11月17日	ホテルルイズ「万葉の間」	一般市民、文化財関係者、県・市町村等行政関係者、図書館業務関係者　他
平成25年度　高大連携 「ウィンターセッション」	平成25年 12月25日～27日	12/25･26　各大学 12/27　盛岡市民文化ホール（マリオスホール）	岩手県内の高校生
第14回　平泉文化フォーラム	平成26年 2月1日～2日	一関文化センター　中ホール	一般市民
ヤングリーダーズ国際研修2014 in IWATE	平成26年 2月14日～23日	滝沢村　岩手山青少年交流の家 釜石市　宝来館　ほか	いわて高等教育コンソーシアムに所属する学生
平成25年度いわて高等教育コンソーシアムシンポジウム「大学教育の質的転換を目指して」	平成26年 2月15日	花巻温泉　ホテル千秋閣 「グレートホール瑞雲」	教育関係者、一般市民

発行連絡先
いわて高等教育コンソーシアム事務局（岩手大学総務企画部総務広報課 内）
〒020-8550 岩手県盛岡市上田三丁目 18-8
TEL.019-621-6855 FAX.019-621-6014
E-mail：ihatov5@iwate-u.ac.jp　URL：http://www.ihatov-u.jp/

構成校
岩手大学　盛岡大学
岩手県立大学　放送大学岩手学習センター
岩手医科大学　一関工業高等専門学校
富士大学

平成25年11月15日発行